菅茶山と乗如上人

はじめに

菅茶山は近くの寺院を訪ねて、学僧と交流したり、詩会を開いている。黄葉夕陽村舎詩の中にその学僧の名前がみられる。大空上人（遍照寺）、嶺松上人（光蓮寺）、如実上人（国分寺）、乗如上人（寶泉寺）、祐教上人（明正寺）などである。他にも龍泉寺、西福寺、東福院、寒水寺などにも足繁く通っている。この中で長期にわたり交流したのが乗如上人ではなかろうか。寶泉寺から発刊された寺伝書「龜居山観音院寶泉寺」等を参考にして、乗如上人とはどのような人物であったのか、菅茶山との交流を明らかにしたい。寺伝書にある「高野山寶門主乗如前官壽像」を見て驚くのは、真言宗檀家の仏壇にある「弘法大師像」と同じ法衣と座す姿であり、高野山真言宗の第三五八世座主で、幕末期に高野山真言宗を率いた人物なのである。茶山と十一歳年少の乗如上人の関係をみてみたい。

一　寶泉寺について（福山市神辺町徳田）

福塩線湯田村駅の北側に隣接して建つ高野山真言宗準別格本山で山号は龜居山である。乗如上人書の「龜居山寶泉寺縁由実記」によると

> 天長年中（九世紀前半）の創建と伝え、本尊は、観世音菩薩で龜居山と号し観音院と称し寶泉院と名乗る。その後いつの頃か廃寺となる。正安～観応年間（十四世紀前半）の頃、宥鍰（ゆうかん）上人が廃寺を再建し住職となったが、再び荒れる。
>
> 元禄年中（一六九〇年代）に宥辨（ゆうべん）上人が再建に尽くし、中興の祖とされている。しかし、元禄十三年（一七〇〇）の火災でことごとく灰燼に帰してしまった。四世宥栄上人が復興に努めた。その後、宥深上人、龍印上人、英寂上人、観如上人と続き、十二世が乗如上人である。
>
> 寶泉寺は境内地が低く、度々洪水に見舞われていたが、九世観如（かんにょ）上人の時、徳永徳右衛門の助けで盛り土、本堂を改築し、十二世乗如（じょうにょ）上人が室内を整えた。
>
> 高野山正智院より壁画を移し堂壁に貼り、又備中国鴨方の画家田中索我（さくが）に山水人物等を各室の襖や杉戸に描かせた。その華麗さで「雛御殿（ひなごてん）」とも称せられた。（抜粋）

とある。田中索我や菅茶山などの襖絵や墨書などが多くが現存している。

高野山準別格本山
龜居山観音院寶泉寺

高野山寶門主乗如前官壽像

二　乗如上人とは

乗如上人は宝暦九年（一七五九）徳田村（現在福山市神辺町）に生まれる。父高木新九郎、母は徳永氏で天保六年（一八三五）高野山で入寂する。実名は乗如、假名は惠（慧）充、号は丹崖と称した。

明和八年（一七七一）、十三歳の時、寶泉寺観如上人に従い剃髪する。

三　茶山との出会いと交流

菅茶山との出会いは、「剃髪後、旁ら隣村川北村菅茶山に従いて経史詩書を学ぶ」と福田禄太郎は述べている。（丹崖乗如和尚畧傳、備後史談巻一）しかし、茶山は明和九年（一七七二）から安永二年（一七七三）に京都に遊学中で、私塾「金栗園」は安永四年（一七七五）の開塾であるから、入塾はその時まで待たなければならない。入塾したのであれば開塾してからであろう。この年、藤井料助（暮庵、当時九歳）も入塾しており共に机を並べたのかもしれない。

安永七年（一七七八）茶山三十一歳、乗如二十歳の時

> 「遍照寺の賞月の筵、期を失する者数人、一挙して以て前責を償わんと擬し、九月九日霊昌恵充の二沙門、桑田元厚及び余、同じく国分寺の後山に登高」（遊研岩記）

とあり、この時期から茶山や霊昌上人（光蓮寺住職）などとも交流していたことがうかがわれ、乗如上人は将来の学僧として茶山や近隣の上人からも認められていたのである。

さらには、この年、乗如上人は高野山に登り、前の寶性院門主兼正智院住職覚道法印の顕密の教えを学び、その愛顧を受けるようになっており、学僧としてその才を認められるようになったのであろう。

天明四年（一七八四）茶山三十七歳　乗如二十六歳

重陽の節句（九月九日）、大空上人（遍照寺）恵充（乗如）上人と共に近くの山に登り、菊酒を味わいながら重陽の節句を祝ったのであろう。遍照寺も寶泉寺も真言宗の寺院であり、二人の上人も交流があったのであろう。この頃、乗如上人は高野山に登っていることから、寶泉寺に帰っていたのであろう。

> 「登高同空・充二上人賦」　黄葉夕陽村舎詩　前編　巻二
>
> 大野秋容入酒觴　大野秋容　酒觴（しゅしょう）に入る
> 登高携客正斜陽　登高　客を携い　まさに斜陽
> 賞心且作須臾樂　心を賞して　且（しばらく）須臾（しゅゆ）楽（たのしみ）を作す
> 世態難逃日夜忙　世態　日夜の忙より逃がれ難し
> 遠水忽明踈雨外　遠水　忽（たちまち）明るし　踈雨（そう）の外
> 孤巒迴出暫雲傍　孤巒（こらん）　迴（はるか）出ず　暫雲（ざんうん）の傍ら
> 人生幾得好重九　人生　幾ときか　好重九（こうちょうく）を得ん
> 紫菊丹萸依舊香　紫菊（しきく）丹萸（たんゆ）　旧に依って香し

酒觴　酒杯。須臾　暫くの間。　世態　世相。　踈雨　あらい雨。　巒　小さくとがった山
暫　わずかの間。　重九　重陽の節句（九月九日）　萸　かわはじまみ、ぐみ。

【ちょっと休憩】　重九　重陽の節句

陰暦九月九日。菊の節句。陽に数である九が重なる日であるからいう。この日には「登高」といって、近くの小高い丘や山に登り、朱萸（しゅゆ、かわはじかみ））の実を頭にさして邪鬼をはらう習慣があった。中国唐代の詩仏と呼ばれた王維の詩にも重陽の節句を詠んだ詩がある。

九月九日　憶山東兄弟　王維
独在異郷為異客　独り異郷に在りて異客と為（な）り
毎逢佳節倍思親　佳節に遭う毎に倍（ますま）す親を思う
遥知兄弟登高処　遥かに知る兄弟高きに登る処（ところ）
徧挿朱萸少一人　遍（あまね）く朱萸（しゅゆ）を挿（さ）して一人を少（か）くを

寛政五年（一七九三）　乗如三十五歳

観如上人の没後、寛應上人（十世）、玉如上人（十一世）と続き、寶泉寺の十二世住職となる。しかし、度々高野山を往来し席の温まることがなかった。住職が不在の時は、同宗の他の寺院の住職が兼帯していた。寶泉寺は、西福寺（神辺町川北）の上人が兼帯していた。

寛政八年（一七九六）　茶山四十九歳

「黄葉夕陽村舎」が福山藩郷校となり、「廉塾」「神辺学問所」と称した。

寛政十一年（一七九九）　乗如四十一歳

聖善院住職となる。法印となり前門主となる。後、正智院に転住し、衆議席に昇進する

寛政十二年(一八〇〇)　茶山五十三歳　乗如四十二歳

茶山は福山藩儒となっており、藩の重役や文人とも交流がある。その関係で乗如上人も藩の重役とも交流が生まれたと思われる。

二月、東門太夫と称した藩重役内藤景充宅で行われた乗如上人の送別式で、茶山は次の詩を送っている。詩会には、山室箕山・中山光繋（福山藩御側用人）佐原義方（福山藩家老）など藩重役も参加している。

「送惠充上人之高野山　録舊作」　惠充上人の高野山に之（ゆ）くを送る
旧作を録（しる）す　黄葉夕陽村舎詩 後編巻八
夙願君業進　夙（つと）に願う　君が業（ぎょう）の進（すす）まんを
今恨君學成　今恨（うら）む　君の学成（な）るを
學成何所恨　学成（な）るは何の恨む所ぞ
遠近人爭迎　遠近　人争い迎えて
妙選竟難辞　妙選(みょうせん)　竟（つい）に辞（じ）し難（がた）し
抛此白社盟　此の白社（はくしゃ）の盟を抛（なげう）つ
迢遞鼎臺遠　迢遞（しょうてい）たり　鼎台（ていだい）遠く
蒼茫薇海横　蒼茫（そうぼう）たり　薇海（びかい）横たわる
別離老愈難　別離　老いて愈（いよいよ）難（かた）し
此行轉愴情　此の行（ぎょう）　転（うた）た情けを愴（いた）ましむ

妙選　念入りに選ぶ。　白社　清い仲間。　迢遞　遠くへだてること。遠いさま。
鼎臺　高野山。　蒼茫　見渡す限り青々として広いさま。　薇海　瀬戸内海。
また、内藤景充から送られた詩が、寶泉寺に蔵されている。日付が庚申二月（一八〇〇）とあり、この時の作であることがわかる。

送君堪見曙天鴉　雨後江頭宜泛槎　彩筆詩成投緑水　錦帆宴止人青霞
路訪知己皆歓語　行対僧儔尽拝嘉　五式画堂訝仏境　何思郷國三春花
　右送
　恵充上人之蓮峰
　庚申二月　藤景充再拝

更に、乗如上人の内藤景充（東門大夫）佐原義方宛の墨書が寶泉寺に蔵されている。佐原義方は福山藩家老で、邸宅が福山城の西側にあったことから西門大夫を呼ばれた人物である。送別の宴の返書を贈ったのではないか。

春来相約轉相差　恨是采芳忙裏過　昨日迎歓有何事　只看戯蝶検残花
　右奉謝　佐原　内藤　二大夫　枉山房得韻麻

享和三年（一八〇三）　茶山五十六歳　乗如四十五歳

　この年から茶山の日記が残っており、訪問者や日々の出来事等をこまめに書き留めている。

一月「高野恵性院送墨及び凍菽乳（高野豆腐）」　八月「恵充上人来たる」とある。

日記には、毎年数回、書や墨、氷豆腐（高野豆腐）などをもらったことが記されており、交流は茶山が没するまで続いている。

文化三年（一八〇六）　茶山五十九歳　乗如四十八歳

　十二月十七日、高野山から寶泉寺に帰っており、乗如上人が茶山を訪ねている。二十四日には弟子の豹蔵・信蔵・大次（治）を連れて乗如上人を訪ねている

さらに、二十九日には、乗如上人を廉塾に招いて詩会を開いている。

「除日小集招恵充上人」　除日　小集に恵充上人を招く　黄葉夕陽村舎詩　前編　巻八
　會者岩子秩・高島百穀・牧千里・向文二讃岐人・松下成叔播磨人・鳥鶵大卿備中人・
　小早川景汲備後人
會計家家期歳杪　会計は家々（かか）歳杪を期す
催科討帳人奔擾　催科（さいか）討帳（とうちょう）　人々奔（はし）り擾（さわ）ぐ
算還詩債愧無才　詩債（しさい）を算へ還すに　才の無きを愧（はじ）る
招得巳公論下掃　巳公（しこう）を招き得て　下掃を論ず

除日～大晦日　科～税など割り当てられたもの　討帳～帳面を調べる　愧る～はずかしく思う
己公～杜甫の友人、ここでは恵充上人を指す　下掃～憂いを除く　論～かたる

【ちょっと休憩】　「除日小集招恵充上人」にある「会者」について

○　岩子秩は岩村南里。名は秩、字は大猶、通称は半右衛門で南里と号した。家は代々讃岐丸亀藩の世臣であったが、十三歳で浪華の中井竹山に入門。二十歳で尾藤二州の塾に入る。後、帰郷し丸亀藩正明館教授となる。当時、教授を辞して、茶山の塾に寄寓していた。

○　高島百穀は後の牧東渚。名は昌、字は百穀、通称は信蔵。東渚と号した。「菅家往問録」の中に名

前があり、この年の文化三年に黄葉夕陽村舎に寄寓していた。
○　牧千里、向文二については不詳。しかし、先の二名と共に「讃岐人」とある。
○　松下成叔は播磨人で成叔は字。敬治と称した。廉塾で六年間都講を務めるが早世する
○　鷦鷯（ささき）大卿は備中人。名は昌、字は大卿、通称は大治で春斎と号した。
○　小早川景汲は備後神辺の人。名は贛（おろか）、字は景汲、通称は文吾または楽々斎と号した。
これらの人々は当時茶山の塾に寄寓していたり、学んでいた人々である。

文化七年（一八一〇）　茶山六十三歳　乗如四十二歳
「九月二十七日　寄正智院書及紙　寄善師院書」とある。「十一月一日　保平達恵充上人回書」とあり、保平（千田村河相周兵衛の子）が乗如上人からの返書を持ってきたとあり、書簡のやり取りをうかがわせる。

文化八年（一八一一）　茶山六十四歳　乗如四十三歳
閏二月六日、後継者にと考えていた頼山陽が京都に出立。七月二十九日、弟恥庵（寛政十二年没）に続き、甥の長作（萬年・公壽）が没する。茶山は後継者問題に頭を悩ますことになる。
「六月五日正智院書及茶至　西福寺上人携雛僧來」西福寺の若僧が入門したのか。
「十月二十九日　高野正智院書弔長作死寄香　即事作答書往書中」とあり、長作死去への弔意の書と香を寄せており、茶山はすぐ返書をしたためている。

文化十年（一八一三）　茶山六十六歳　乗如四十五歳
「七月八日　得高野正智院」とある

文化十一年（一八一四）　茶山六十七歳　乗如四十六歳
「二月二十二日　正智院恵土宜（どぎ、土産）」「二月二十三日　正智院　上人来」
「三月十九日　恵充上人来宿　持諸古書・繍仏・古器等物来　遂宿」「二十日与恵充同上西福寺」とあり、遅くまで話が弾み茶山宅に泊り、翌日には西福寺を訪ねている。
「三月二十三日　相従之寶泉寺　送充公」「三月二十四日　使直江之宝仙寺送格雲餞物」とある。
茶山は三月、藩主阿部正精から江戸出府を命じられる。
五月六日　茶山、二度目の祇役に出発し、六月五日　江戸福山藩上屋敷に入る。
九月十四日「高野持明院賜酒達正智院書」　九月二十四日「高野山持明院来話」
十一月二十二日「高野正智院主来訪惠懐帋（懐紙）及茶」　十一月二十九日「正智院来訪」
十二月一日「二本榎高野邸惠充師不在」　十二月四日「正智院惠塩漬松蕈（松茸）」
茶山は江戸上屋敷に、乗如上人は芝二本榎にある「高野山江戸在番所高野寺」に滞在していたと思われる。この寺は、高野山の江戸別院で、関東地方の布教の拠点として、また、幕府との折衝などに対応していた。

文化十二年（一八一五）　茶山六十八歳　乗如五十七歳
茶山は二月二十六日に帰国の途に就き、三月二十九日　神辺に帰っている。
この年には恵充上人については記述はみられない。

文化十三年（一八一六）　茶山六十九歳　乗如五十八歳
二月十二日、三月四・七日、七月二九日、一二月二十一日に高野山から書、氷豆腐などが届く。

文化十四年（一八一七）　茶山七十歳　乗如五十九歳
二月八日、正智院より諸蔌が届いている

文化十五年（一八一八）　茶山七十一歳　乗如六十歳
「二月四日、高野正智院及啓雲（運）書各寺氷蔌」とあり恵充上人だけでなく、他の寺院の啓雲上人からも書や届け物があったことがわかる。

文政元年【二月十一日改暦】（一八一八）十月七日、正智院から書が届いている。

文政二年（一八一九）　茶山七十二歳　乗如六十一歳
「四月十八日　寶泉歌僧入門、高野惠性院索書各恵有」とあり、寶泉寺から若い僧が入門している、また、恵性院から書をもとめられたのであろう。
「十月二十四日、恵正智院壽詩數章」とある。塾後継者の北條霞亭が福山藩儒となったことを寿いだ書だったのだろうか。

文政三年（一八二〇）　茶山七十三歳　乗如六十二歳
「三月二十四日　送雲平之京事」とあり、華岡青洲の長子雲平が京へ出発している。（後述）
四月十一日、五月二十七日、八月九日、書、氷蔌、煙草、甘露梅などが届いている。

文政四年（一八二一）　茶山七十四歳　乗如六十三歳
「二月七日　凍腐が届く」
「二月十三日、寶泉寺新住持来達正智院書」とあり、寶泉寺の住職が茶山を訪れ乗如上人の書を届けている。乗如上人この年、碩学（大学者）に推挽され、三月には正智院門主となっているので、その報告を茶山にしたためたのではないか。
寶性院は南山義学の学風を以て誇れる名院であるが、火災に遭うなど、その再建が急務であった再建時乗如上人は、洞玉法眼に上壇の床、天井絵を法橋片山索準に襖の芭蕉を描かせた。

文政五年（一八二二）　茶山七十五歳　乗如六十四歳
「九月六日　正智院書来自江戸」
乗如上人はまた江戸に上り、七年間在府している。江戸からも書を茶山に送っている。
幕府は乗如上人を十万石諸侯の礼をもって待遇したという。

文政六年（一八二三）　茶山七十六歳　乗如六十五歳
四月十七日、書、二詩一詩を寄せている　十二月、龍華院大含房（道猷）が書を寄せている

【ちょっと休憩】　寶泉寺から多くの上人が高野山で活躍
道猷は福山藩高橋氏の出で寶泉寺に入り、高野山正智院主なった上人で、大含と称し介峯と号している。他にも乗如上人以後、寶泉寺十三世見瑞、十四世泊應、十五世圓我、十六世弘如、十七世圓海と高野山で活躍している。十八世弘應上人は、山守村石川氏の出で、高野山金剛峯寺第四百四世座主管長となり、高野山を率いた上人である。

文政七年（一八二四）　茶山七十七歳　乗如六十六歳
「二月二十四日　寶正院江戸書及詩来」とあり、乗如上人は正智院から寶性院門主へと転住したの

か、兼帯したのか分からないが、肩書が変わっている。

文政八年（一八二五）　茶山七十八歳　乗如六十七歳

「五月十六日、高野山利（理）性院来恵金及凍腐云其傔学詩頗好之」とある。利（理）性院が誰であるか不明だが、学問の進み具合が満足でき、詩作も頗る好と話している。

七月　乗如上人が江戸から書・摺扇・教本を届けている。

「八月十七日　高野理性院惠観心寺米」とある。

文政九年（一八二六）　茶山七十九歳　乗如六十八歳

「一月十九日　惠充上人書及土宜（どぎ）来氷腐・馬蹄硯・烟袋諸物」「龍華院道猷からも凍腐、風鎮、烟袋等」が届けられる。

「三月七日　高野寶性院書来惠詩及富士海苔」とあり、茶山への配慮を続けている。

茶山は、次のような詩を作っている。

「寄惠充上人」　「上人余近村産住高野寶性院今祇役江戸」　黄葉夕陽村舎詩　遺稿　巻六

惠充上人に寄す　上人は余の近村の産、高野寶性院に住む、今江戸に祇役す

生在郷鄰溝樹連　生は郷隣に在（あ）りて　溝樹連なり
老居天外亦前縁　老いて天外に居り　亦（また）前縁
錫飛不怪音塵杳　錫飛　音塵怪まれず杳（はるか）なり
趺坐空嗟夢想懸　趺坐（ふざ）空（むな）しく　夢想の懸（けん）を嗟（なげ）く
微雪半宵煨芋火　微雪半宵（はんしょう）　芋を煨（わい）す火
落花孤榻瀹茶煙　落花孤榻（ことう）　茶を瀹（やく）す煙
舊房松偃知何日　旧房松偃（しょうえん）す　知る何の日ぞ
猶隔雲山路一千　猶（なお）雲山を隔てること　路（みち）一千

祇役　命に奉じて任務に赴くこと。　天外　はるか遠いところや高いところ。
錫　僧の使う杖。　趺坐　両足の甲を反対側のもものの上に置いて足を組んで座ること。
半宵　夜半、夜中。　煨　うずみ火でむし焼きにする。　榻　こしかけ、ながいす。
瀹　ひたす、あらう。

文政十年（一八二七）　茶山八十歳　乗如六十九歳

「一月五日　得寶性院書」

「三月七日　国分・寶泉・東福四雛僧来受句論各有惠」三院の若い僧たちが学びに来たのか。

「五月二十七日　達寶性院江戸書・万波（岡山藩の人）書等」とあり、八十歳の賀を祝ったのだろうか。

茶山、八月十三日　八十歳で没し、網付け谷に葬られる。

この年、乗如上人は江戸から帰山する。金剛峰寺寺務検校寺青巌寺（金剛峯寺の前身）に移住し法印職に進み一山の衆徒長となる。（第三五八世座主となる）

四　茶山没後の乗如上人の動静

文政十一年（一八二八）　乗如七十歳

貞観寺僧正眞雅大徳に大師号宣下申請の上奏文を草す。この上奏文は南山漢学の発展を示す

名文でであったという。六月、朝廷より正使を迎え、大師号宣下の許可を得る

文政十二年（一八二九）　乗如七十一歳
　乗如上人は翌年、衆徒長として一山の龍象を率いて眞雅の墓前に報告す。
　さらに、将軍家や天皇家の法会に乗如上人が導師として数多くとりおこなう。
　年代は不明だが、高野山の西塔の再建、寶性院方丈新造、寮及び楼門の建立す。さらに、大塔の鐘楼、山王院拝堂や仏像の修補を数多くおこなう。

天保二年（一八三〇）　乗如七十二歳
　百金の祠堂を建立する

天保六年（一八三五）　乗如七十七歳
　八月二十一日、高野山にて入寂す。奥之院参道右側に葬られる。

大正十二年（一九二三）　正智院書庫火災。乗如上人の詩稿等は焼失す。

四　まとめにかえて

茶山と乗如上人の関係は、乗如上人が剃髪した十三歳で茶山に入門（備後史談第一巻）とある。だが、茶山は京への遊学を繰り返しており、本格的な塾は安永四年（一七七五）金粟園まで待たなければならない。しかし、遊学時にも度々帰郷しており、神辺在住時には近郷の子どもらに経史詩書を教えていたのであろう。寶泉寺で剃髪し、高野山に登る安永七年までの七年間が二人を強く結びつけたのであろう。金粟園では、藤井料助（暮庵）と机を並べていたのではないか。

茶山は早くから乗如上人の才を認め、福山藩重役との詩会に乗如上人を招いたり、寶泉寺での詩会に藩重役と同行したことが茶山の日記に遺されている。

高野山での乗如上人について、福田祿太郎氏は「備後史談巻一」に投稿し「補陀落院義剛の三教指歸考十三巻、維實上人の文鏡祕府註、印融法印の文筆眼心鈔註の如き、琳琅誦すべき好精麗の文體に豹変せしは乗如の力にして、實は茶山の學に因せり」と評している。

江戸後期、高野山の学派は二つの系統があった。無量壽院派は、九州亀井南冥の学風を受け、寶正院派は乗如上人が中心であり代表者で、その詩風はもちろん書風までも茶山と酷似していたという。茶山のもとに乗如上人からの書が再三届いているのは、その詩稿を批評・校正の依頼もあったのではないか。乗如上人は高野豆腐・煙草・茶など再三送っていることからも、その緊密ぶりが窺える。

茶山も乗如上人の事が誇らしかったのであろう。「寄恵充上人」と題した詩を、「上人余近村産住高野寶性院今祇役江戸」と詠じている。さらに、寶泉寺から高野山にのぼった道猷、下岩成村出身の良基へと続くのであり、茶山の願った「学種」が実を結んだ一例であろう。

しかし、大正十二年（一九二三）正智院書庫が火災で焼失したので往復書簡などは残っていないのが残念である。

今回乗如上人について調べていく中で、茶山の感性の豊かさ、交友の広さだけでなく、茶山につながる郷土の先人達の活躍を知ることができたことは何よりもうれしいことであった。先にまとめた「菅茶山顕彰会　ゆかりの地訪問」シリーズで取り上げた内容と重なるものがあることをご容赦いただきたい。

後になりましたが、乗如上人に関するたくさんの情報や資料の提供をいただいた林多恵子先生、寺伝書を提供していただいた寶泉寺住職に、心からお礼を申し上げたい。

【付録一】　茶山詩の中で乗如上人を詠んだ詩を紹介

「雨日同充上人賦　分烟字　時上人將之阿州」　集外

新泥滑々雨綿々　新泥（しんでい）滑々（かっかつ）たり　雨綿々（めんめん）
弱柳嬌花春正妍　弱柳（じゃくりゅう）嬌花　春正（まさに）妍（けん）なり
載酒誰尋生白室　酒を載せて　誰か尋ねん　生白（しょうはく）の室
臥痾虚渡踏青天　痾（あ）に臥して虚しく渡る　踏青（とうせい）の天
雉雊屋外山含晩　雉（きじ）屋外に雊（な）いて　山は晩（くれ）を含み
市散橋頭竹罩烟　市散じて橋頭（きょうとう）　竹烟を罩（こ）む
明日渡杯滄海遠　明日渡杯（とはい）　滄海（そうかい）遠く
自知三徑轉蕭然　自ら知る　三徑（けい）　轉（うたた）に蕭然（しょうぜん）たり

充上人　恵充上人。阿州　阿波の国。妍　美しい。新泥滑々　雨で道がぬかるむさま。綿々　しとしと降る。生白室　茶山の居宅。踏青天　春の青草を踏んでいく。最もよい季節雊　鳴く。含晩　夕暮の色が忍び寄る。罩烟　夕靄がたちこめる。渡杯　船で海を渡る。杯は杯のような小舟。三徑　小径。蕭然　ものがなしい。

（大意）しとしとと降る雨に道はぬかるみ、たおやかな柳、あでやかな花と春の美しい季節だ。誰かこの俗離れした自分の室に、酒をさげて来ないものか。病に伏して春の好季を空しく過ごすことだ。雉は屋外で鳴いて、山は夕暮れが忍び寄り、市の賑わいは終わって、竹藪は夕靄がたちこめている。折よく訪ねてきてくれてありがたいが、あなたは、明日この悪天候をおしてはるばる海を渡って、阿波に行かれるとの事。せめて、門まで送って出て、庭先の小径に立って見送るこの寂しさはやるせないことだ。

この他、黄葉夕陽村舎詩の中には載せられていない詩（集外）もあるので紹介する。

遺稿　「春初同登寶泉寺分滿壁画滄州句為韻得滿字
時住持上人將之高野山播磨成叔讃岐中條魏卿各将帰省」
高僧亦惜離　樽有香醪滿　只為暗愁長　翻知春昼短
竹声廊廡清　梅気簾檐暖　痛飲不須辞　明朝雲雨散

遺稿　「奉次内藤太夫於寶泉寺見寄韻」
春郊終日雨蕭々　恨為沈痾負□招　深感王公携酒意　奈何泥濘野程遥

遺稿　「寶泉寺即事」七絶
草堤風暖犢眠花　松寺僧稀雀浴沙　勝概不知春日永　還期驚見柳陰斜

【付録　二】　茶山・乗如上人と華岡家の関係

乗如上人は、高野山の西塔の再建、寶性院方丈の新造、寮及び楼門の建立、大塔の鐘楼、山王院拝堂や仏像の修補をおこなっているが、その費用はどこからの喜捨なのであろうか。

乗如上人と外科手術で有名な華岡青洲やその兄弟と繋がっており、特に華岡青洲の末弟鹿城との関係が深く大阪商人との関係もでき、多額の喜捨に結び付いたのではないかと考えられる。

（一）高野山と華岡家は、紀の川でつながっていた。

高野山は紀ノ川（和歌山）の上流にあり、九度山からの表参道「町石道」で結ばれている。当時、高野山への物資や人の往来は、主に紀の川の舟運で行われていた。乗如上人もこれを利用し、大坂方面へ出かけていたのではないか。華岡家は紀の川河口の村で代々の医師で、詩文等を通して親交があったと考えられる。

（二）茶山・乗如上人と華岡家との親交

文化六年（一八〇九）赤石宋相（茶山の弟子、備前国和気の人）が紀州華岡青洲に医術を学ぼうと志し、茶山に別れを告げに来訪する。茶山は詩をつくり門出を祝っている。

送赤石宋相適紀州學神医　　黄葉夕陽村舎詩　前編　巻八
君聞瘍科出神醫　擔簦千里去追随　君自敏捷兼勤勉　成業何曾愆所期
余會遊跡遍畿甸　仙縁未訪徐福祠　倘教勝具如舊日　随君直到紀水湄
君窮方技余窮勝　携帰行闘所得奇　不奈衰老懶出門　計日秪恐君歸遲
好學神膏與異術　療余再黒鬢邊絲

「瘍科出神医」とある。神医は華岡青洲のことである。茶山がこの詩を作った頃には、青洲の名前が広く聞こえていたのだろう。「もし、自分が健脚なら君に随って紀州に遊び、君が医術を窮めている間に、自分は名勝の地を尋ねたい。しかし、もう老境で旅に出ることは懶い。君が学んできた医術を以て、この白髪を再び黒くしてもらいたい」という大意であろう。

文政二年（一八一九）八月、青洲の長子雲平（葛城）が廉塾に入塾し、文政四年三月まで滞在していているのは、赤石宋相を通してのことであろう。また、乗如上人の影響もあったのではないかと思われる。

文政三年「二月二十一日　花岡随賢書来恵氷乳」「三月二十六日　紀州花岡随賢書来」とあり、華岡青洲からの書と届け物である。（花岡は華岡であり、随賢は華岡家が代々名乗る号で青洲は三代目）その書に、長子雲平を一時帰国させてほしいとあったのか、三月二十七日、雲平が父青洲の還暦を祝うため紀州に帰る際に、次の賀詩を託している。

紀州華岡國手華誕號青洲　　黄葉夕陽村舎詩　後編　巻八
不怪君身専壽彊　仙膏神術盡奇創　應諳除福采残藥　非授華陀遺得方
玉女祠臨蓬島近　金剛峰接杏林長　若將眞訣弘傳世　何啻君身専壽彊

「寿彊は長寿である。神医と言われ、当今の華陀（後漢の名医）と言われた青洲が長寿なのに不思議はないが、その神術を広く世に伝えるならば、長寿を享受するのは独り青洲だけではあるまい」と祝している。

また、青洲の兄弟で三男良応は乗如上人の正智院へ入り正智院を継いでいる。このように、華岡家と茶山は繋がっており、華岡家と茶山・乗如上人との関係もみえてくる。

（三）乗如上人、青洲の末弟華岡鹿城の墓碑の撰文を書く

華岡鹿城は安永八年（一七七九）華岡青洲の末弟として生まれ、文政十年（一八二七）に没する。鹿城は、大坂で開業し、医塾「春林軒」「合水堂」で活躍。二男の治兵衛は商人で

紀州の手織り木綿を大坂に卸している。この二人が大坂の商人や富豪との懸け橋となり富豪津田休兵衛等の喜捨につながり、諸堂の再建や仏像等の補修につながったのではないか。

鹿城の墓は高野山にあり、墓碑は乗如上人の撰文であり（備後史談巻一）、その親交がわかる。まさしく、茶山の交友の広さが乗如上人の偉業につながっているといえるのではないか。

菅茶山と恵充上人の交流

年号	乗如上人の動静	菅茶山の動静（茶山日記を中心に）
宝暦九年（一七五九）	深安郡徳田村に生まれる。父高木新九郎、母は徳永氏	明和三年（一七六六）遊学 明和五年（一七六八）遊学 明和七年（一七七〇）遊学 明和九年・安永元年（一七七二）遊学
明和八年（一七七一）	寶泉寺観如上人に従い剃髪（十三才） 茶山に入門し経書詩書を学ぶ。	安永四年（一七七五）家塾「金粟園」を開く 安永六年（一七七七）遊学
安永七年（一七七八）	高野山に登り、寶性院門主兼正智院住職覚道法印の愛顧を受ける。	9/9 霊昌・恵充上人、桑田元厚らと国分寺裏山に登る（遊研岩記） 安永九年（一七八〇）遊学
天明元年（一七八一）		黄葉夕陽村舎を開く
天明四年（一七八四）		九月、「登高同空・充二上人賦」の詩を詠む
寛政五年（一七九三）	観如上人が没したため帰住し寶泉院の住職となる（三五歳）度々高野山に登る	
寛政一一年（一七九九）	聖善院住職となる（四一才）後、法印となり前門主となる 正智院に入り、衆議となる	
寛政十二年（一八〇〇）	内藤景充宅で送別の宴（藩重役　山室箕山、中山光繫、佐原義驍、茶山など）	二月　福山藩重役内藤景充宅で乗如上人送別式「送恵充上人之高野山　録舊作」を詠む 8/27　弟恥庵が京都で病没
享和三年（一八〇三）		1/22　高野恵性院送墨及凍菽乳 4/27　午後寶泉寺老僧と西福寺において會す 8/25　恵充上人來

文化三年（一八〇六）		12/17	寶泉上人來
		12/24	豹藏・信藏・大次と惠充上人を訪ねる
		12/29	惠充上人を招く 同席した者、弟子の岩村南里、牧千里 松下敬二、鵜鶏大卿、小早川文吾
文化五年（一八〇八）		7/28	得惠充上人江戸書及詩
		12/5	得惠充上人書及惠三物
文化七年（一八一〇）		2/6	頼山陽、京都に出立
		9/27	寄正智院書及紙　寄善師院書（欄外）
		11/1	保平達惠充上人回書
文化八年（一八一一）		6/5	正智院書及茶至　西福上人携雛僧來
		10/29	高野正智院書弔長作死寄香 即時作答書往書中「唐絶句選」
文化九年（一八一二）		2/20	高野正智院寄書・氷豆腐
		7/11	寶泉小上人來（西アチヘユキシヒ人）
文化十年（一八一三）		7/8	得高野正智院
文化十一年（一八一四）	江戸に出る 二本榎高野寺に起居（七年間）し、大名や文人と交流し浄財をあつめるための活動をする。 幕府は乗如上人を十万石諸侯の礼を以て遇した。	2/22	正智院惠士宜（どぎ）
		2/23	正智院上人來
		3/19	惠充上人來宿　持諸古書繡佛古器等物來　遂宿
		3/20	与惠充同上西福寺
		3/23	相従之寶泉寺　送充公
		3/24	使直江之寶泉寺　送格雲餞物
		5/6	藩主阿部正精の命を受け江戸へ二度目の出発をする。
		6/5	江戸福山藩上屋敷に入る
		9/14	高野持明院賜酒達正智院書
		9/24	高野山持明院來話
		11/22	高野正智院主來訪惠懐帋及茶
		11/29	正智院來訪
		12/1	二本榎高野邸惠充師不在
		12/4	正智院惠塩漬松覃

文化十二年（一八一五）		2/26	**江戸を出発し歸国の途につく**
		3/29	神辺に歸る
文化十三年（一八一六）		2/12	正智院書來恵氷菽二袋
		3/4	正智院書來　啓運恵凍腐
		3/7	正智院書來
		7/29	高野正智院書來
		12/21	高野顯正院恵氷豆腐
文化十四年（一八一七）		1/10	寶泉院來
		2/8	得正智院恵諸菽
文政元年（一八一八）		2/4	高野正智院及啓雲（運）書各寺氷菽
		10/7	得正智院書
文政二年（一八一九）		4/18	寶泉歌僧入門　高野恵性院索書各恵有
		10/24	恵正智院壽詩數章
文政三年（一八二〇）		3/24	送雲平之京事
		4/11	高野正智院及啓運僧各恵氷菽
		5/27	正智院書來、
		8/9	正智院書來恵煙袋・甘露梅
文政四年（一八二一）	「寶泉寺新住持來」とあり、寶泉寺の住職は見瑞巌上人となる 碩学に推挽さる（六十三才）	2/7	高野恵性院恵凍腐
		2/13	寶泉寺新住持來逹正智院書
文政　五年（一八二二）	江戸に下る	9/6	正智院書來自江戸
文政　六年（一八二三）	高野山龍華院に寶泉寺から道猷上人が登っている	4/17	得正智院乗如書及二詩一歌
		12/25	高野龍華院大含書　恵烟袋
文政　七年（一八二四）		2/24	寶正院江戸書及詩來
文政八年（一八二五）		5/16	高野山利（理）性院來恵金及凍腐 云其倈學詩頗好之
		8/17	高野理性院恵觀心寺米

文政九年（一八二六）

1/19　惠充上人書及土宜來氷腐・馬蹄硯・烟袋諸物　龍華院道猷寄凍腐・風鎮・烟袋等

3/7　高野寶性院書來惠詩及富士海苔
「寄惠充上人　上人余近村産住高野寶性院今祇役江戸」（遺稿巻六）

文政十年（一八二七）

三月台命により、寶性院門主となる帰山す。金剛峰寺寺務検校寺青巌寺に移住し、法印職に進み一山の衆徒長となる。（第三五八代座主、六九才）

1/5　得寶性院書

3/7　國分・寶泉・東福四雛僧來受句論各有惠

5/27　達寶性院江戸書・萬波書等

8/13　八十歳で没す。網付谷に葬られる

文政十一年（一八二八）

貞観寺僧正眞雅大徳に大師号宣下申請の上奏分を草す。
六月宣下御伝正使を迎え、法光大師の号が許される。翌年一山の龍象を率いて眞雅の墓下に報告す。
　将軍家や天皇家の法会を乗如上人が導師としてとりおこなう。
華岡鹿城や大阪の富豪津田休兵衛等の寄進を受け、西塔を建立す。さらに、大塔の鐘楼、山王院拝堂や仏像の修補を数多くおこなう。

天保六年（一八三五）

高野山にて入寂（奥之院参道右側に葬られる。（七十七歳）

大正十二年（一九二三）

正智院火災。乗如上人の詩稿等は焼失す

龜居山観音院寶泉寺　　龜居山観音院寶泉寺　亀山本弘住職
菅茶山顕彰会会報復刻版　　菅茶山顕彰会
菅茶山とゆかりの人々　　菅茶山記念館
茶山詩　五百首　　島谷真三・北川勇　児島書店
丹崖乗如和尚略伝　　備後史談第一巻三号
菅茶山　上・下　　富士川英郎　福武書店
なにわ大坂をつくった100人　　公益財団法人　関西・大阪21世紀協会ホームページ
菅茶山遺稿　　柏崎順子　太平文庫六二
座主一覧　　高野山真言宗総本山金剛峯寺ホームページ